■館長あいさつ

着任にあたって

館長　菊　池　　慧（きくち　けい）

澄み切った秋空の向こうに岩手山がどっしりと構えています。近くでは紅葉と松が織りなす彩りが日に映えています。ここ博物館からの景色はうっとりするような装いを演出し、私はそれを眺めて堪能しています。

この10月、前館長の海妻矩彦氏の後を引き継ぐこととなりました。若輩者ではございますが、みなさまのお力添えをいただきながら岩手の自然史・文化史の拠点づくりをして参りたいと存じますので、これまでと変わらないご指導・ご支援をお願いいたします。

海妻先生には長きにわたって館長職にあられ、先々を見据えた博物館の有り様を示されますとともに県の文化芸術振興の基本に関わる条例の制定に尽力されるなど、当博物館の充実発展と岩手の文化振興に貢献されましたことに心から謝意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

岩手は豊かな自然に恵まれ、そこに築かれた歴史文化の宝庫でもあります。今年はその自然や歴史文化が大きな関心事となる動きがありました。６月には、岩手宮城内陸地震、続いて岩手県沿岸北部地震（７月）に見舞われ痛手を被ったのですが、断層が大きくずれ込むような異変を目の当たりにして、自然への畏怖の念を強くする一方で、岩手の大地はどのようにできているのか知りたいと思った方も多かったのではないでしょうか。また、９月の平泉文化の世界遺産への登録には、だれもが固唾をのんで吉報を待ち望んだものと察します。登録延期という結果に涙しましたが、一連の運動を通して平泉は輝きを増したようにさえ感じます。このような出来事を契機として岩手の自然や歴史文化を知りたいという気運が高まっているように思います。

こうしたなかで岩手県立博物館は、県民の学習意欲に応える生涯学習中核機関として、よりいっそう充実した役割を果たしていかなければならないと考えます。

そこで先ごろ、私たちは社会の変化や県民のニーズに即した博物館としての使命は何かをとりまとめたのですが、その一つが「ユニークで多彩な資料の蓄積とその活用に基づく岩手の自然史・文化史の拠点（となる）」というものです。

博物館にとって資料を収集し蓄積継承することは土台となる活動です。「もの（資料）を集める」ことによって「知が集い」、「人が集う」という博物館の機能を満たすことにつながっていくからです。幸いにも岩手の県土は、５億年にわたる大地、多様な生物相、縄文・平泉などの歴史的な変遷、地域性豊かで多彩な民俗事象を背景としていますから資料には恵まれています。良質な資料の発掘収集と蓄積に努め、それを基にした調査・研究を深めることで新たな価値の発見につなげたいと思います。

ところで、見た目にも立派な木はしっかりした根を張っているに違いありません。もし、根が貧弱なのに地上の部分が見事すぎる木があったとしたら、やがて枯死するか倒れることになるでしょう。

作家の水上勉氏は、‘木は、幹や枝振りそれに花や葉は注目される。しかし根を忘れてはならない’というような警句を発していますが、木に限らず、表に見えない部分こそが大きな役割を担ったり価値を有する例は多いものです。研究・教育の分野もその例外ではありません。

私たちが、資料の収集を始めてから新しい価値の発見にたどり着くまでの道のりは、外からは見えにくい、いわば木の根に当たる部分で占められていますが、これこそが博物館の生命線といっていいほど大切なものです。原点に立ち返り、まずはその根をしっかり育てる環境を整えることを第一歩としたいと思います。そうすることによって県民の知的欲求を刺激するような展示や教育普及が自ずと展開できるものと信じています。

県民とともに歩む博物館としての機能を強化し、知的活動への寄与と新たな地域文化の創造を目指して博物館の使命を果たして参りたいと思いますのでよろしくお願いいたします。